

保育環境が子どもと絵本との関わりに及ぼす影響の 発達の検討

学籍番号 249207

氏 名 金谷 美穂

主指導教員 柳岡 開地

副指導教員 中橋 美穂

1. 背景と目的

1.1 研究の背景

園生活において子どもは、環境の中で用意された様々なものを活用しながら遊びを展開しており、絵本も保育において重視される環境要素の一つである。幼稚園では、読み聞かせや絵本を題材とした活動など、保育者の意図に基づく絵本活動が日常的に行われ、絵本の教育的意義や発達の効果に関する知見が蓄積されてきた。これらの取り組みはいずれも、保育者が意図をもって子どもと絵本との関わりを構成するものであり、保育者が主導する関わりを前提としたものである。

一方、園生活の中では、保育者の直接的な働きかけを伴わず、子どもが自ら絵本を手に取り、友だちと見たり一人で物語の世界を味わったりする姿も多く見られる。こうした自発的な絵本との関わりを支える環境として、多くの園では廊下や共有スペースの一角に絵本コーナーが設けられ、子どもの絵本との関わりを支えている。

しかし、従来の先行研究は読み聞かせ場面や特定の保育実践に焦点を当てたものが多く、保育者の関与が少ない自由遊びの時間における子どもの自発的な絵本との関わりを、環境との関連から詳細に検討した研究は必ずしも十分とはいえないのが現状である。そのため、自由遊び場面における子どもの自発的な絵本との関わりを、異なる環境的側面（物的環境、人的環境、活動的環境）から実証的に明らかにしようとする点に本研究の意義があるといえる。

1.2 目的と方法

本研究は、保育者の意図による活動ではなく、自由遊びの時間において子どもが自ら絵本を手に取り読む姿に着目し、その自発的な絵本との関わり方の特徴を明らかにすることを目的とする。方法として、絵本コーナーの環境構成を変更し、その前後における子どもの絵本との関わりを観察・分析する（調査1・2）。また、絵本への関心を高める契機となる可能性が示唆されている絵本作り活動を自由遊びの時間に導入し、活動実施前後の絵本コーナーにおける子どもの行動を分析する（調査3）。分析は年齢別に行い、年齢や発達段階の違いに着目しながら、自由遊び場面における自発的な絵本との関わりを環境および絵本に関する活動の両側面から検討する。なお、分析にあたっては山田（2012）を参考に絵本の読み方を分類し、その分類に基づいて読みの様相を整理・分析する。

2. 結果

調査の結果、子どもの自発的な絵本との関わりは、物的環境、人的環境、活動的環境という複数の要因が相互に関係しながら、子どもの絵本への関心や関与の在り方を支えていることが明らかとなった。

絵本コーナーの環境構成の変更は、年齢によって異なる形で子どもの絵本との関わりに影響を及ぼすことが示唆され、4歳児においては「大人との関わり」が絵本活動を成立させる基盤として機能しており、5歳児においては、子ども同士の相互作用を引き出す物的環境の工夫が、絵本との関わりを支える重要な要因となることが明らかとなった（研究1）。

また、こうした環境構成の効果には、周囲にいる大人の存在といった人的環境も影響している可能性が示唆されたことから、観察者が絵本コーナーに常駐していない状態における子どもと絵本との関わりを観察し、人的環境の影響と子どもの自発的な読み行動の特徴について検討した。その結果、絵本コーナーにおける子どもの読み方は、物的環境の整備のみならず、観察者の存在といった人的環境との相互作用によって形成されており、4歳児では、大人の存在が子どもの絵本体験を成立させる基盤として機能しているのに対し、5歳児では、大人の存在が友だちとの共有的な読みを促す媒介として作用していることが示唆された（研究2）。

さらに、自由遊びの時間に絵本作りの活動を導入し、その実施前後における子どもの絵本との関わりの変化を観察した結果、4歳児・5歳児のいずれにおいても、読み方に変化が見られた。これらの結果は、絵本作りの活動が年齢にかかわらず子どもの主体的な絵本との関わりを促進する可能性を示唆するものであった（研究3）。

3. 総合考察と今後の課題

本研究では、幼稚園における絵本コーナーの環境構成や人的環境、ならびに絵本作り活動が、子どもの自発的な絵本との関わりにどのように影響するかを多角的に検討した。

その結果、幼児の自発的な絵本との関わりは、個々の興味や発達段階のみによって成立するものではなく、①絵本と出会いやすい物的環境、②安心して関われる人的環境、③絵本に主体的に関わる活動という三つの要因が相互に作用する中で、年齢とともにその質や意味を変化させながら形成されていくことが明らかとなった。

一方で、いくつか課題も残されている。本研究は一幼稚園を対象とした観察研究であるため、得られた知見の一般化には制約がある。また、行動観察を中心とした分析であったことから、子どもの内的な動機や絵本活動における意味づけまでは十分に明らかにできていない。さらに、読み方の類型に着目した分析を行ったものの、子どもが絵本に関わった時間量、すなわち読み時間については分析対象としておらず、絵本との関わりの深まりや持続性との関連を十分に検討できていない。

これらの課題を踏まえ、今後は複数園を対象とした比較研究を行うとともに、行動観察に加えて保育者へのインタビュー等を組み合わせることで、幼児の自発的な絵本との関わりをより多面的に捉える研究が求められる。また、絵本コーナーと幼稚園図書室といった異なる性質をもつ絵本環境を比較することにより、環境の違いが子どもの絵本との関わり方や読み方にどのような影響を及ぼすのかを、より具体的に明らかにしていくことが今後の重要な課題である。